

第 48 回中央社会保障学校 from名古屋が開催

全国各地とWEBで結び、のべ719名の参加者が集まる

8月28日、29日の2日間にわたり、第48回中央社保学校がWEBで行われ、2日間合計でのべ719名の参加がありました。29日には津市立三重短期大学の長友薫輝先生のコーディネートで、4名のシンポジストから発言を頂きました。

4名のシンポジストから「人手不足」「業務過多」等、コロナ禍の厳しい状況報告

国民のいのちと暮らしを第一に考える政治に転換という世論を広げよう



大阪民医連の大島会長からは、大阪の医療体制について説明して頂きました。大島会長は、「開業医の協力を求める声もあり、皆さんアンテナキャッチを必死で行っているが、1人の開業医で対応できる患者数は限られている。医療というエッセンシャルワークにはゆとりが必要。」と訴えました。

保険師で名古屋市職労働組合の塩川さんは、保健所内の業務である、電話による健康観察・聞き取りが本当に大変であり、また煩雑な事務業務に対しても事務職員が1人だけという、慢性的な人手不足な

どの問題点をお話されました。保険師の数も不足しており、「地域担当制で充実した体制にするには、人口1万人に1人の保険師が必要だが、この人口割合を見ても、名古屋市の保険師は50人足りない。」と訴えました。

保育部会の武藤さんは、「子どもの感染が増えている中で、保育所職員や子どもに不安が広がっている。保育所の運営に必要なお金は、国からの分だけでは不十分で、足りない分を市町村が独自に持ち出している為、自治体によって格差が生じる要因となっている。国や自治体が保育にもっとお金を使い、人員配置基準を上げて欲しい。」とお話されました。

愛労連の竹内さんからは、コロナ禍でこれまで行ってきた労働相談について説明して頂きました。愛知県は8回のなんでも電話相談で615件の相談があり、「コロナ感染が長期化する事で、利用できる支援制度が尽きてしまい、生活困窮に陥るケースが増加している。」との報告がありました。

コロナ禍でこれまでの社会保障の脆弱性が露呈している中で、「公的な所にはゆとりのある人員が必要」という意識が広がってきています。SNSの活用や対話を重ね共感者を増やし、「命をまもる緊急行動」への結集、「新しいち署名」への取り組みを広げ、国民のいのちと暮らしを第一に考える政治に転換という世論を大きくしていきましょう。

第 21 回 年金裁判のご案内

- ◆日時 9月10日(金) 午前11時
- ◆9時30分から、公園前でスタンディング宣伝活動
- ◆10時15分から 傍聴抽選(見込み)